

悪霊 第七部・テロルの夢

悪
霊

第
七
部
・
テ
ロ
ル
の
夢

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道日市の地主の娘。川奈産業の大株主
猪俣佐和子……………党での名前は井上。戦闘的技術団に所属する
海老沼千恵子……………家出した資産家の娘。佐和子の配下となる
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤児院建設に奔走する。
佳代……………貧しい農家の娘。佐和子のハウスキーパー
金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
飯島貴代美……………元女工。モスクワ留学から帰国
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に。
植木……………与太者あがりの「黨員」
曾根……………黨員
朴正烈……………朝鮮人青年
安藤浄海……………貧民街の僧
手塚……………「党」の戦闘的技術団メンバー。佐和子の直属の上司
三沢……………党中央委員。特高警察のスパイ
森本警部……………警視庁特高課長

【時・場所】

昭和七年（一九三二）八月～八年一月。軽井沢、東京

Ⅲ

「そういえば最近……」

仏間で数珠をくりながら、安藤浄海が言った。

「あの男、顔を見せなくなつたなあ。鮮人部落には来てるのかい？」

「鮮人だなんて、そういう言い方、よくないよ」

仏間の隅で、安藤に背を向けて足の爪を切っていた金沢文子は唇を尖らせた。

「朝鮮人を馬鹿にしてる連中の言葉遣いじゃないか。あんた震災の時、朝鮮人を虐殺した連中を批判する本を書いたんじゃないやなかつたの？」

「そうだった、すまんすまん」

安藤は苦笑して、頭をかいた。

九月も終わろうとしていた。貧民窟の荒れ寺の庭にも、柔らかな秋の日差しの下、金木犀が咲き始めている。

「で、あの小沼とかいう若いの、どうしてる？」

「さあね」

文子は天井を見上げた。

「八月いっぱいはお村の家について、犬の肉なんかも食ってただけど、九月に入ってから、とんと音沙汰なしなんだ」

「やっぱり、朝鮮人と同じ暮らしは無理だったのかね」
「そんなことないさ。ちゃんと馴染んでたよ」

「ほお」

安藤は好色な笑みを浮かべ、文子ににじり寄った。

「さては文子、おまえにもさぞ馴染んでいたのだからな」

言うなり、安藤の手が文子の尻に触れた。同時に、安藤は顔を顰めて呻いた。

「そういうの、嫌だって言ってるだろ！」

文子は立ち上がり、怒鳴った。安藤は両手で股間を押さえていた。文子は手の甲で、安藤の股間を叩いたのだ。

「あたいは、寝る相手は自分で決めるんだ。あんたはだめだって何度言ったら分かるの？」

脂汗を浮かべて顔をあげた安藤に、文子は言った。

「あんたは、かわいいそうじゃないから、だめなの！」

「わしは随分、かわいいと思うぞ」

安藤は、苦しそうに立ち上がり、腰をとんとんと叩いた。

「わしは何も、寝てくれなんて頼んでないのに……おまえみたいな色っぽい娘に、ちょっとかい出しただけで、こうやってきんたまを殴られる。ほんとうにかわいそうなのは、わしだ」

ぶつぶつ不平顔で言う安藤に、文子は思わず噴き出した。月並みで通俗的な男だが、どこか憎めない。

「きんたま、叩いてほしくて、分かってて触ってくるんじゃないだろうね」

からかうように言う文子に、安藤は真顔で反論した

「そんな奴がいるか」

「さあ、変態ってのは何をされて喜ぶんだか、分かったもんじゃないからね」

顔を赤くした安藤がさらに反論しようとしたとき、庭のほうから声があがった。

「文子ねえちゃん」

みなしこの少女の一人が立っていた。

「お客さんだよ」

「お客？」

「うん、女の人」

文子は訝しげな面差しを浮かべ、階段を降りて庭に出た。今にも壊れそうな三門の下に、芸者のような島田髷に髪を結び、赤い模様の目立つ派手な着物をまとった、背の高い女が立っている。「はじめまして」

女が微笑んで、軽く頭を下げた。文子は来客を見上げ、口を開けたまま面差しを硬直させた。

十五歳の文子にとって、見たこともない美貌の持ち主だった。

「伊集院満枝と申します。こちらに、小沼さんがお見えではありませんか？」

白いレースのテーブルクロスが掛けられた卓上に置いてある砂糖壺にささったスプーンを、指先でいじくりながら文子は問うた。

「あんた、小沼さんのなんなの？」

「わたくしは、おともだちのつもりだけれど……」

伊集院満枝は、婉然えんぜんと微笑えんぜんんで言った。

「むこうはたぶん、そういうふうには思っていないでしょうね」

「……………」

「むしろ、わたくしのことを憎んでいるかもしれないわ」

「わかんねえ」

文子は、謎かけのような満枝の答えにいらだつたように、グラスのカルピスを飲み干した。

荒れ寺を訪れた満枝に、小沼は来ていないと告げると、満枝は文子に興味を示した。あなたは小沼さんのお知り合いなの？ そうなの、どんなおつきあいをなさってるの？ じろじろと見つめてくる安藤浄海の視線を嫌い、文子は、ご馳走してくれたら教えてあげる、と言った。二人は貧民窟を出て、九段神社の通りのカフェに入ったのだった。

「ごめんなさい」

ちゃんと話すわねと言いながら、満枝は苦笑した。でも……。

「わたくしにもよく分からないのよ」

それから、小沼が満枝の家の小作人だったこと。東京に出て非合法活動を続ける小沼を、満枝が援助しつづけたことを話した。だが、この夏から小沼と連絡が取れなくなった。小沼が所属する団体を探し当て、彼が貧民窟に出入りしていることを突き止め、芸者のなりをして訪れたのである。

「梅雨から、八月が終わる頃までは、近くの朝鮮人部落に住んでいたんだけどね」

文子は言った。

「九月になると、急にいなくなつた。もう一ヶ月近く、顔を見てないんだ」

不満げに頬をふくらませた文子を、のぞき込むようにして満枝は問うた。

「あなた、小沼さんのこと、どう思っているの？」

「どうって？」

「好き、とか」

文子は、顔を顰しかめて満枝をにらみ、言った。

「好きも何も、あいつとは、何度も寝てやったんだ」

「そうだったの？」

満枝は眼を丸くした。文子はあわてて付け加えた。言っとくけど、あたひ、別に、あいつのいろってわけじゃねえよ。

ほんとう？ と言いたげな満枝に、うんざり顔で文子は続けた。

「勘違いするな。あたひは、かわいそうだと思つた男とは寝てあげることにしてるんだ」

「かわいそう、だから？」

「そうだよ。小沼さんは、寝てあげた男の一人ってだけだよ」

瞬まばたきもせず、心の底から驚いたように、満枝は文子を見つめた。文子はたじろぎ、気味悪そうに面差しで言った。

「なんだよ……」

「新鮮だわ……そういう考え方もあるのね」

「新鮮？」

「わたくしは、男の人と交わるのは、からだを刺し貫かれる屈辱的な行為だと思ってた。でも、そんなふうには、男の人に慈悲を施すという考え方もあるのね。まるで仏典に出てくる、バスマミトラみたいだわ」

「いい加減にしてくれないかなあ」

文子は心から苛立った。

「あたいは、小学校も卒業してないんだ。難しい事を言われても、わかんないよ」

バスマミトラは、漢字では「婆須蜜多」と表記される。『華嚴経』に登場する、悟りを求めて遍歴する少年・善財童子と出会う娼婦だ。仏の教えを極めるには禁欲的であらねばならないと思いつこんでいる童子に、バスマミトラは言う。「私に接吻し、私の身体に触れることで、あなたは悟りを開けるのです」と。

満枝の説明を、文子は顔を背けて興味もなさそうに聞いていたが、ふと、満枝の口から発せられた言葉の、これまでにない弱々しい響きに耳に止めた。

「小沼さんは、あなたのことを好きなのかしら」

満枝を見やると、彼女は頬杖をついて店の外の通りを見つめていた。微笑みが消え、寂しげな風情が浮かんでいる。

「まさか！」

文子は肩をすくめた。

「男は誰だって、女と寝たいんだよ。好きかどうかなんて関係ない。あたいが好きだったからじゃなくて、あたいが女で、あたいが自分から寝たいと言ったから、寝た。それだけさ」

「でも、満足なさってたんでしょ？」

満枝は、文子に眼差しを向けた。美しさゆえに漂っていた傲岸さが消え、頼りなげな面差しに、文子はなぜか、顔が赤らんだ。

「満足って、誰が？」

「小沼さん」

「妬いでるの？」

そう言われ、満枝は俯き、そうかもしれないわね、と苦笑した。

「わたくしも、あなたと同様、かわいそうな方を見ると、助けてさしあげたくなるの」

「助けるって？」

「お金よ」

溜め息をついて、満枝は言った。

「わたくしにできるのは、それしかないのだから」

そのとき満枝の脳裏に浮かんでいたのが、小沼健吾ではなく、孤児院建設を目指して東奔西走している安西小百合であることを、文子が知る由もなかった。

文子は訊ねた。

「あなた、小沼さんに会いたいの？」

「ええ」

「会って、お金を渡したいわけ？」

「そうよ」

「だったら」

文子は猫のように眼を光らせ、満枝を見つめた。

「そのお金、あたにくれよ」

「あなたに？」

「猫ば、なんかしないよ。あたひ、小沼さんが何をしたいのか、よく知ってるんだ。小沼さんのためになるように、そのお金はちゃんと使うからさ」

「小沼さんがしたいことって……」

満枝の瞳に、再び歓喜が宿った。期待に息を弾ませ、満枝は訊ねた。

「どんなこと？」

身を乗り出してきた満枝を、探るように見ていた文子は、やがて何かに思い立ったように、ふつと息を漏らした。

「あんた、ひよっとして……」

支那のアカの事を書いた本、あんたが小沼さんにあげたんじゃないだろうね？

文子の問いに、満枝は眼を見開き、満面の笑みを浮かべ、小さく叫んだ。

「あなたもお読みになったの？」

頷く文子の手を、満枝は握りしめた。

「あなたと、もつとお話したいわ。夕食をご一緒しません？」

その日の夜更け。

朝鮮人部落は、闇の中に鎮まっていた。どんなに貧しい日本人でも、あえて住むことを躊躇うような地域を、正式な土地の取得や賃貸といった手続きなしに、行き場のない朝鮮人たちが寄り集まってできあがった部落には、電気も水道も通っていない。

腐臭を放つ小川の側に、四畳半ほどの広さの藁座をしき、四隅に柱をたてて筵で覆っただけ的小屋が、朴正烈の住み処だった。

「ジョンヨル」

筵の外で声があった。金沢文子の声だった。破れた毛布にくるまっていた正烈は、身を起こし、筵をめくった。文子が立っていた。

「文子か」

微笑む正烈の視界に、もう一人の女が飛び込んできた。伊集院満枝だった。

三人でいたいんだって。文子が朝鮮語で言った。正烈は、啞然として満枝を見つめた。文子はさらに説明した。

この女はまだ男を知らない生娘なんだけど、あたひと話していたら、男と寝たくなったんだそう。でも怖いから、あたひも一緒についていてほしいんだって。あたひは見るだけ。それであんたがいいのなら、この女、抱いてやってくんねえかな。

正烈は、どう答えていいか分からないというふうに、黙したままだった。伊集院満枝は無言で筵をめくり、小屋のなかに入った。正烈と向き合って座り、その面差しを見つめた。月明かりが、

右の額ひたいから顎あご、さらには右の胸にかけて、右の眼を潰して走る一筋の傷跡を照らし出した。満枝は、手を伸ばした。右の人さし指で、正烈の傷跡を撫でた。

「震災のとき、日本人に斬られた傷跡さ」

背後で文子と言った。

「知ってるだろ。日本人が自警団をつくって、朝鮮人をおおせい殺したのを」

満枝は振り返って文子を見あげた。それから再び正烈の傷に眼差しを向けた。

「この方は、見たのね」

首を傾かげる文子を見やり、満枝は言った。

「支那の革命家の報告書に書かれていた、ああいう風景を」

そう言って満枝は、正烈ににじりよった。その顔を両手で挟はみ、抱き寄せた。正烈の頭を胸に抱いた。頭を抱かれながら、正烈の手が満枝の乳房をつかんだ。満枝は眼を閉じて、ため息を漏らした。

「この方も……文子さんにとっては、かわいい、そう、方なのね」

「そうだね」

頷うなずく文子に、満枝は続けた。

「あなたがおっしゃるとおり、かわいい、そんな男性にだったら、からだを刺し貫かれても平気かもしれないわ」

その夜、満枝は、処女を失った。

ざらざらした莫塵ごじぎに仰向けになり、覆い被さってきた正烈を迎える満枝の面差しは、不安に怯えていた。その固い扉が押し開けられたとき、満枝は眼を閉じ、苦痛の呻きを漏らした。正烈が腰を動かしはじめると、小さな悲鳴をあげ、眼を開けて文子を探し求めた。隅に立っていた文子が近寄ると、やっと母親を見つけた迷子まよごのような眼差しをする。痛い？ そう訊ねた文子に、満枝は救いを求めるように、手を伸ばした。文子がその手をつかんで自分の乳房に押しつけると、満枝はやっと安堵した面差しになった。

「あんたも、なんだかかわい、そうなんだね」

その言葉に、満枝は嬉うれしげに眼を閉じた。緊張していた四肢がほぐれ、正烈の挿入を受け止めることができた。正烈が果てた後、満枝は身を起こし、文子ににじり寄った。恍惚の表情で文子の乳房の谷間に胸を埋め、その首にすがりついた。

「だめだよ」

文子は、満枝をそっと押し戻した。顔をあげ、切なげな眼差しを向ける満枝に、文子は言った。「あたいは、女とは寝ないんだ」

そう言って文子は、正烈に寄っていき、彼を押し倒した。脚を広げて正烈の股間にまたがった。腰を上下に動かし、喜悦ひたに浸る文子と、己の陰部を赤く染めた鮮血とを見比べた。自然と体が動いた。満枝は、文子と向き合うかたちで、正烈の顔の上にまたがるように脚をひろげ、膝をついた。正烈の舌が、満枝の陰部を嘗なめ始めた。

「男としてみて、どうだった？」

喘あえぎつつ笑みを浮かべて文子は問うた。

「悪くないわ」

文子は、不意にこみあげた笑いを両手で口を覆って押さえ、腰の動きをとめた。どうしたの？ そう問われ、文子は言った。前に、この朴と小沼さんと三人で寝たことがあったんだ。三人で？ うん、そのとき言ったんだ。小沼さんも朴さんも、これで二人は仲間だよって。

正烈の舌づかいが、満枝のからだを快楽で満たしつつあった。それとは別の欲びが満枝の胸にわいて出た。

「そうね」

満枝は、手を伸ばして文子の唇に触れ、言った。

「いい仲間になりましたようね」

翌朝、文子と正烈が眼を覚ました時、すでに満枝の姿はなかった。同じ頃、貧民窟に近い通りで、一人の紳士が、鞆丸を潰されて死んでいるのが発見された。

IV

十月になった。

京橋のビルヂング、階段を上って会計事務所の看板を掲げた部屋のドアを開けた佐和子は、一瞬足を止めた。

事務所のなかにいたのは、手塚と曾根、そして植木だった。佐和子は、面差しがこわばるのを止められなかった。佐和子の軽侮に満ちた眼差しを浴びて、植木は笑顔を装いつつも、卑屈に背を丸めた。

「菅沼くんは？」

手塚は問うた。海老沼千恵子の変名である。具合が悪くて、と佐和子が答えると、手塚は頷き、一同を見回して面差しを引き締めた。

「党中央から指令が下った」

ソファに座った佐和子は、自然と背筋が伸びるのを感じた。

「佳代ちゃん」

麻布の洋館でダイニングルームの掃除をしている佳代に、二階の自室から出てきた海老沼千恵子が階段から声をかけた。はい、とエプロンで手をふいて直立した佳代に、千恵子は言った。

「あいつの声がうるさいの。手当して」

はい、そう小さく言って佳代は、水をくんだボウルと布巾を手に階段をあがった。千恵子の部屋の隣にある物置のドアを開けると、小沼健吾が押し込められていた。横倒しに床に転がり、両手で股間を押さえ、エビのように背を丸めて呻いている。佳代は部屋に入り、小沼の傍らに座った。ズボンの前をはだけ、水でしぼった布巾を押し当てて冷やした。その背後、ドアのところ、千恵子は腰に手を当てて軽蔑した眼差しを小沼に向けた。

小沼健吾は半月近く、この洋館に監禁されていた。当初、小沼をどう扱うかで女たちの意見は

割れた。いちばん強硬だったのは千恵子で、睾丸を潰して殺してしまおうと言い出した。佳代は、いつになく必死だった。千恵子にすがりつき助命を願った。佐和子は佳代の嘆願を受け入れた。千恵子は、だったら党中央に引き渡して処分をゆだねましようと言った。こんな奴、一刻も早く追い出したいわ。そういう千恵子に佐和子は、だめよ、と言った。国家主義団体の男に「隠れ家」をかぎつけられたと党中央に知られたら、今度の計画から外されてしまう。

結局、計画実行まで小沼を監禁することとなった。佳代と二人きりにすると逃亡されかねないので、佐和子か千恵子のどちらかは、必ず家にいることになった。班長の手塚から呼び出しがあったとき、佐和子が一人で出かけたのは、そのためである。

千恵子は、とらわれの小沼に対し、凄まじい残忍さを発揮した。日に一度は、必ず股間を蹴り上げた。小沼の股間は陰囊^{いんのう}だけでなく太ももの半ばまで腫れ上がり、嘔吐感と高熱に苛まれ、血尿が止まらなかった。あんたが逃げ出さないための用心よ、と千恵子は嘯いた。

小沼は物置部屋に入れられ、外から鍵をかけられた。食事と下の面倒は佳代が見たが、必ず佐和子か千恵子が立ち会った。小沼は抵抗しなかった。そんな気力も湧かなかった。霞がかかったようにぼんやりとした脳裏に、モスクワから亡命してきた白系ロシア人から聞いた話が思い浮かんだ。

モスクワの秘密警察は、男性政治犯を尋問するときに女性の拷問官を使うのだそうだ。女性の靴の踵で股間を踏みつけられ、じわじわと体重をかけられると、ほとんどの男は「自白」する。それだけでなく、見下していた女性から想像を絶する苦痛を味わわされることで心に傷を負い、気力をなくし、廃人同然の生活を送るようになってしまうそうだ。

そうかもしれない……。

絶え間ない苦しみのなかで、小沼は思った。かつて小学生だった伊集院満枝に股間を蹴り上げられたことがある。二年前、猪俣佐和子の日傘で睾丸を突かれた時も、凄まじい激痛だった。その激痛をもたらしたのが女性であり、なんの抵抗もできずに屈服した屈辱は、耐え難かった。

いま、小沼は毎日のように、同じ苦痛を与えられる。十八歳の小娘から蹴り上げられるたびに、猪俣佐和子や佳代の目の前で、悶え苦しむ惨めな姿をさらさねばならないのだ。腫れ上がった陰囊を、佳代に冷やしてもらおうことさえ、惨めさを増すだけだった。

「感謝なさいよ」

佳代の背後で海老沼千恵子が権高な声をかけてきた。

「佳代ちゃんの頼みがなかったら、あんたなんか今頃、この世にはいないんだからね」

「異議はないね」

計画の説明を終え、手塚は三人の同志を見回した。曾根と植木は緊張した面差しで、深く頷いた。猪俣佐和子は独り、何か言いたげに手塚を見つめている。

「井上くん」

手塚は訝しげに佐和子に問うた。

「不満な点でもあるのかね」

「あ……いえ。そんなことはありません」

佐和子は慌てて首を振った。

「必ず、やってみせますわ」

「佐和子さま」

帰宅して洋館のドアを開けるなり、千恵子が駆け寄ってきた。

「いかがでした？」

息を弾ませて問う千恵子だったが、佐和子の暗い面差しに、笑みをおさめた。

「何か、ありましたの？」

佐和子は、出迎えた佳代に離れているよう、目配せした。佳代は一礼して、一階のキッチンの奥にある自室へと消えた。

食卓に向かい合って座り、佐和子は一つ溜息をついて説明した。

「千恵子さんが、最初におっしゃったことだったわ」

「わたくしが、何を言いましたっけ？」

佐和子は、軽井沢で千恵子が、ブローニングやフォード車は、まるでアメリカのギャング映画の小道具のようだとはいやいだことに触れた。

「それなのよ」

「ということは……まさか……」

「そう、その、まさか」

銀行強盗ですってよ。

佐和子は言った。当日、佐和子と千恵子は、資産家令嬢を装い、フォードを運転して、手塚と

植木、そして曾根を銀行近くまで運ぶ。彼らが銀行に入って現金を奪っている間、佐和子と千恵子は外で待機する。銀行から出てきた三人を車に乗せて逃走する……。

ブローニングは？ 不服そうに訊ねる千恵子に、佐和子は答えた。

一応持つて行くけれど、曾根さん以外は使わないように言われたわ。手塚さんも植木も、徴兵経験があるけれど戦地には行っていない。人を撃った経験があるのは、満州事変に従軍した曾根さんだけだから……。

「なんだか、がっかりしちゃったわ」

千恵子は苦笑して肩をすくめた。

「てっきり、命がけの大仕事をやるだろうと、図書館に通って調べ物までしたのに」

「落胆なさらないで」

佐和子は、自分を励ますように言った。

「手塚さんがおっしゃるには、近日中に武器をたくさん購入しなければならなくなったので、お金が必要なのだそうよ。ということは……」

「武器をとって戦う日が、もうすぐ来るということ？」

「そう」

眼を輝かせた千恵子の肩を叩き、佐和子は壁にかけたカレンダーをめくりながら続けた。

「銀行を襲うのは三日後の十月六日。そして一ヶ月後の十一月七日はロシア革命の記念日。その日になにか大きなことを決行するのではないかと手塚さんはおっしゃっていたわ」

「大きなことって……」

千恵子は、佐和子の腕を掴んで絞り出すように言った。武装蜂起？
佐和子は頷いた。

「いよいよね……！」

千恵子は声を弾ませて飛び上がり、部屋の中を回転しながら、踊るように歩き回りつた。ひとしきり踊った後、椅子に座って問うた。

「ところで、どこの銀行を襲うの？ 日本橋？ それとも丸の内？」

佐和子は答えた。標的は、大森駅近くにある銀行。ある党員の実家その銀行と取引しており、内部の様子が分かるというので選ばれたそうだ。

「目標額は一万円だそうよ」

「たったの？」

千恵子が呆れた声を出した。

「そのくらいのお金、わたくし、佐和子さまと一緒に美人局で稼いじゃありませんか。拳銃や運転の練習にあれだけ時間をかけて、たったそれっぽっち？」

「もう決まったことよ」

佐和子は宥めた。党中央の指令には従うのは、党員が絶対に守らなければならない鉄則である。それよりも……。佐和子は続けた。

「二年前、わたくしは党の東京支部の幹部として、メーデーに武装蜂起する計画に加わっていたの」

「二年前のメーデー？」

千恵子は、記憶をまさぐるように言った。まさか、あの男が言っていた、あの……。その眼差しは、小沼が監禁されている物置部屋のほうに向けられた。

「そうよ」

佐和子は、面差しを引き締めていずまいをただした。

「あの男の言うことも、一理あるの。確かに、不手際が多かったわ。武器はそれなりに集まったけれど、それをどこに保管して、どのように現場に運ぶのか、そのあたりの計画がずさんだった。だから失敗した」

ねえ、千恵子さん。佐和子は言った。

「あなたのように、図書館に通って、いろいろな材料を集めて、それをもとに計画を練るような人が、あの頃の党にはいなかったの」

確かに、わたくしも悪かったのだわ……。そう呟き、佐和子は俯いた。

「佐和子さま」

千恵子は立ち上がり、佐和子の傍らに立って、彼女の肩に手を乗せた。

「二年前に何があったかはともかく、今は、あの男はわたくしたちの敵よ。敵に情けをかけては、勝利はおぼつかないわ」

佐和子は眼差しを上に向けた。弱気になった姉をなじるような、励ますような千恵子の面差しに、笑みを浮かべて応えた。

「わかっているわ。わたくしが言いたいののは、もし、党が武器を集めて、再び武装蜂起するのならば、必ず、二年前の失敗を繰り返してはいけないということ。今度こそ、社会を変えるために、

成功させなきゃならない。そのためには……」

佐和子は、肩に置かれた千恵子の手の甲を、自分の掌で包んだ。

「今回の銀行強盗が成功したら、あなたが集めてくれた情報や、あの地図を、三沢さんにお見せするわ。そして……」

千恵子の手を強く握りしめ、佐和子は言った。

「今度こそ、わたくしたちが中心になって、世界を変えるのよ」

その夜、佐和子の部屋で、ふたりは何時にもまして激しく、互いのからだを貪り合った。

翌朝、海老沼千恵子は朝食を終えると、図書館に行く、と飛び出した。過去の銀行強盗の成功例を調べるのだという。

千恵子を見送って、ダイニングルームに戻ると、佳代が、朝食の皿やカップを片付けていた。

「佳代ちゃん」

佐和子に声をかけられ、佳代は、汚れた食器を積んだお盆を、テーブルに置いてこちらに顔を向けた。その澄んだ眼差しにたじろいだ佐和子は、しわがれた声で言った。

「ごめんなさいね」

え？ 佳代は眼を丸くして首を傾げた。いえ……。佐和子は、ともに佳代を見ることもできなかった。なぜこの娘は、このような状態にあっても、ふつうでいられるのだろうか？

「あなたに、ひどいことを言ったじゃない。つまり……」

首を傾げたまま見つけてくる佳代に、ますます口調が乱れた。

「あなたが、あの男と、何かあったはずだ……なんて」

眼差しを物置部屋に向けた。佳代は合点したように、眼差しを床に落とした。

「でも……あなたも長年、ハウスキーパーをやっていたのだから、わかるわよね。党を飛び出して転向した男が、この家を見張っていた。それが、どれだけわたくしたちにとつて、重大なことなのか……」

佳代は首を傾げたままだった。このひとは何を言いたいのだろうか？ 佳代にはわからなかった。

佳代は確かに、小沼のハウスキーパーだった。小沼は、佳代に指一本触れなかった。プロレタリア作家の大橋多喜蔵は、毎晩のように佳代を抱いた。抱かれて佳代は何も感じなかった。

佐和子は言った。

「あなたを辱める気はなかったの。それだけはわかってね」

男性に抱かれることは、別に辱めではない。そんなことより……。

佳代は、ハウスキーパーとして、最初は小沼、次に大橋多喜蔵、今は佐和子に仕えている。大橋は、何もしなかったし、何もできなかった。佐和子は、いろいろと努力しているが、佳代の眼から見ても危なっかしい。

いちばん頼りになるのは、小沼だ。その小沼がなぜ、あんなふうに扱われ、ひどい怪我を負わされ、物置に閉じこめられなければならないのか？

知らず知らず、佳代の眼差しに疑いの色が浮かんでいた。その色を敏感に受けとめたように、佐和子は声を荒げた。

「何が言いたいのよ……」

え……？ 佐和子の面差しに浮かんだ怒気に、佳代は戸惑った。つづいて発せられた佐和子の言葉は、佳代には理解できなかった。

「あなたまでが、私を馬鹿にしているの！」

顔を覆って佐和子は、階段を駆け上がった。佳代は後を追った。佐和子は、物置部屋の鍵を開け、中で寝ていた小沼を、廊下に引きずり出した。

「見てなさい！」

苦しげに呻く小沼の襟首を掴み、その耳元に口を寄せ、佐和子は叫んだ。

「今度こそ、成功させてみせるわ！ それまでは殺してなんかあげない！ 苦しみながら、見てなさい。今度こそ、やりとげてみせるから！」

この人は……。佳代は訝しかった。どうして、自分のほうが、いま向き合っている他人より「上」であることを誇示しようとするのだろうか？

廊下に俯せになった小沼の背中に馬乗りになり、後頭部の髪の毛を掴んで、顔を床に押しつけ喚いていた佐和子は、不意に憑きものが落ちたように口を閉ざし、しばし虚空を見つめていたが、やがて立ち上がり、階段を降りて一階のダイニングルームに消えた。

「あいつは……」

佳代の足下で、廊下に突っ伏していた小沼が喘ぎながら口を開いた。

東京に来たばかりの佐和子は、不器用で、無口な小娘だった。不安に苛まれ、必死に落ち着ける居場所を探していた。この二年間でどんな経験をしてきたかは分からない。一見したところ、

佐和子はふてぶてしく、けばけばしくなったが、不安に怯える小娘という本質は少しも変わっていない。その怯えが、過剰な攻撃性となっているだけだ。

そう佳代に伝えようとして、言葉にできなかった。やっとこう言った。

「お前より、よほど、かわいいそうな女なんだ」